探検！ 言葉の森 43

「マジ」の謎？

早稲田大学教授 森山卓郎（もりやまたくろう）

「マジ」にはちょっとした謎がある。まず、品詞の謎。「マジ」の元の言葉（？）は、「真剣な顔つき、本気、誠実」などの意味の「真面目」である。これは形容動詞。「マジ」の場合も、「あれはマジだ」のように終止形が「だ」、連体形が「マジな話」「マジなやつ」など「な」になる。その点で形容動詞（語幹）である。

ただ、ふつうの形容動詞ではない。新情報に対する応答として、「雨、降っているよ。」→「マジ⁉」などの使い方もあるのだ。これは、元々は「マジでそうか」などという一種のチェック表現だったのかもしれないが、もはや応答の感動詞になっている。

ちなみに、「母校のチームが勝ったという知らせに対しての応答」で、その応答から察する「予想度」を調べたことがある。その結果、「マジ⁉」の方が「マジで⁉」より予想度が高かった（五段階で2.4と1.97）。「マジで⁉」の方が意外ということになる。言い換えれば「マジ⁉」は真剣に疑うのではなく、新情報を受け入れる応答としての用法もあると言える。ちなみに「マジかよ⁉」の予測度は1.77で、かなり意外だったという判定だ。

さらに、マジは副詞にもなっている。「マジやばい！」などと言う場合、「マジ」は「やばい」を修飾しているからだ。「マジ」はそれだけ多様な用法で使いたくなる語ということだろうか。

さて、漱石『虞美人草（ぐびじんそう）』には「マジ」に通じる「真面目」がある。宗近が小野に藤尾との関係について意見する場面だ。

君もこの際一度真面目になれ。（略）――どうだね、小野さん、僕の云う事は分らないかね」「いえ、分ったです」「真面目だよ」「真面目に分ったです」「そんなら好い」

この「真面目に分ったです」は、「マジ、わかった」に相当するような用法だ。しかし、ここにも謎がある。「真面目に」だと「マジ**に**わかった」となるはずだ。「真面目でわかった」とは言わない。ところが、ネットで検索すると「マジに～」よりも「マジで～」の方が圧倒的に多い。なぜだ？

よくわからないが、「マジ」が「本気」に相当する語と認識されているのかもしれない。「本気」と書いてマジと読ませる漫画もはやったようだ。「本気」なら「本気に～」ではなく「本気で～」という言い方だ。が、よくわからない。

――マジ、お前は本気か？

「マジ」も、いろんな情報が飛び交う現代社会を象徴する言葉の一つなのかもしれない。わざわざ「マジ」と言うということは、「マジでない状況」も多いということかもしれないからだ。マジか？と言いたくなるようなニュースも飛び込んでくる。

いろんな「マジ」を駆使しつつ、「マジ」になったりならなかったりして、大切なことはそれなりに真面目に、なんとかやっていきましょう！